

厚生労働省科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業（がん政策研究推進事業））
分担研究報告書

全国在宅訪問栄養食事指導研究会セミナー企画に関する研究

研究分担者 前田佳予子

武庫川女子大学 生活環境学部 食物栄養学科 教授

日本在宅栄養管理学会（訪栄研） 理事長

研究要旨

在宅がん患者の栄養障害は、化学療法などの治療効果や合併症の併発に大きな影響を与えるため、在宅訪問管理栄養士の果たす役割は大きい。また、地域では今後ひとり暮らし高齢がん患者が増加する可能性が高く、がんと栄養に関する基本的な知識の習得とともに、ひとり暮らし高齢者の多様な問題に対応できる在宅訪問管理栄養士の育成が求められている。本研究では、在宅訪問管理栄養士認定研修会の教育プログラムの中にがんと栄養に関する体系的な教育プログラムを織り込むとともに、症例テキストなどを通じて、ひとり暮らし高齢者に関わる多様な問題についても対応できる優秀な在宅訪問管理栄養士の育成を目指す。

A. 研究目的

がん患者では栄養障害が高率に合併するが、在宅がん患者の栄養障害については、対応がほとんどなされていない。このような背景の中、日本在宅栄養管理学会は、在宅訪問管理栄養士の育成に力を入れているが、本研究では、在宅訪問管理栄養士認定研修会において、がんと栄養に関する体系的な知識の習得を可能にする教育プログラムを開発し、在宅がん患者の栄養改善による患者の治療効果や QOL の向上に貢献できる優秀な在宅訪問管理栄養士を育成することを目的とする。

B. 研究方法

1. 在宅訪問管理栄養士認定研修会の教育プログラムの開発

在宅がん患者の栄養管理に必要な基本

的知識に関してリストアップし、協議する。
例えば、

がん患者全体の栄養学的特徴
臓器別がん患者の栄養学的特徴
治療に伴うがん患者の栄養障害
在宅がん患者の栄養アセスメントの
ポイント

合併症状別に対応する食事・調理
症例テキストの作成

2. 在宅訪問がん患者における症例検討

症例テキストの作成に向けて、現在対応している在宅がん患者の訪問栄養指導内容をまとめる。

C. 研究結果

今年度は、日本在宅栄養管理学会の理事長、副理事長、事業委員長・委員等で「がんと栄養」に詳しい講師の選考および在宅

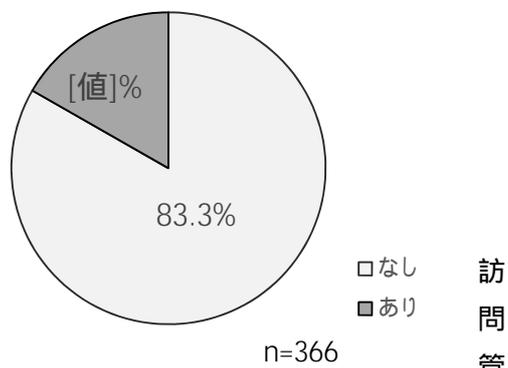


図1 平成24・25年度の事例におけるがん患者の割合

表1 がん患者の癌発生部位

部位	値
耳下腺腫瘍	1 (1.6)
左頸部軟部悪性腫瘍	1 (1.6)
悪性リンパ腫	4 (6.6)
甲状腺癌	1 (1.6)
甲状腺腫	1 (1.6)
食道癌	1 (1.6)
肺癌	4 (6.6)
肺癌、胃癌	1 (1.6)
乳癌	4 (6.6)
乳癌、肺癌	1 (1.6)
左腎癌	1 (1.6)
胃癌	8 (13.1)
胃静脈癌	1 (1.6)
胃平滑筋肉腫	1 (1.6)
肝腫瘍	1 (1.6)
肝臓癌	1 (1.6)
肝臓癌、胃癌	1 (1.6)
膵癌	1 (1.6)
膵臓癌	1 (1.6)
膵体尾部癌	1 (1.6)
膵頭部癌	1 (1.6)
胆管癌	1 (1.6)
大腸癌	6 (9.8)
S状結腸癌、多発性肝細胞癌	1 (1.6)
上行結腸癌	1 (1.6)
上行結腸癌、肺癌	1 (1.6)
膀胱癌	4 (6.6)
卵巣癌	1 (1.6)
子宮癌	1 (1.6)
子宮頸部上皮肉腫瘍	1 (1.6)
子宮体癌	1 (1.6)
前立腺癌	5 (8.2)
末期癌	1 (1.6)
n=61	
値は人数(パーセント)を示す	

講師：武庫川女子大学 福尾恵介教授
 研修会開催日：平成27年12月5日(土)
 場所：日本経済大学渋谷キャンパス
 また、当学会の管理栄養士が在宅療養者

の「がん」にどの程度関わっているかを把握するために当学会と公益社団法人日本栄養士会で認定を出している「在宅訪問管理栄養士」において認定合格する際に提出する

366事例をもとに調査した結果、下記の内容が得られた。

366事例中、61事例(16.7%)において、がん患者への訪問栄養食事指導であった(図1)。なお平成24年・25年度では、胃がんがもっとも多く、次いで大腸がん、前立腺がん、膀胱がん、悪性リンパ腫、肺癌、乳がんであった(表1)。

今後、特徴的な症例をもとにテキストを作成する。

D. 考察

在宅管理栄養士の育成は、今後在宅医療を推進するうえで重要である。特に、超高齢社会を迎えた我が国においては、地域における高齢がん患者に対する在宅医療体制を早急に構築する必要がある。特に、ひとり暮らしの高齢者は低栄養に陥りやすいため、がんによる栄養障害要因に加えて、社会的な要因や孤立など多様な要因に対応できる包括的な支援が求められる。

在宅訪問管理栄養士認定研修会の教育プログラムにおいて、がんと栄養の体系的な教育プログラムの中に、ひとり暮らし高齢者や老老介護など高齢者に特化した内容も盛り込む必要がある。

E. 結論

年々増加するがん患者では、栄養障害が必発であるが、ひとり暮らし高齢者では栄

養障害がより一層際立つ。このような背景の中、本研究は、がんと栄養の基本的知識やひとり暮らし高齢者の多様な問題に対応できる優秀な在宅訪問管理栄養士の育成を目指すものである。平成26年度は、教育プログラムの開発に向けた準備を行った。

G. 研究発表

1. 論文発表：なし

2. 学会発表：なし

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許取得：なし

2. 実用新案登録：なし

3. その他：なし